

新刊紹介

遺伝子医学 MOOK 21 号 最新ペプチド合成技術と その創薬研究への応用

木曾良明 編・向井秀仁 編集協力
メディカルドゥ/B5・316頁・5,600円

ペプチドは、古くは、インスリン、オキシトシン、などのホルモン製剤から始まり、LH-RH アナログ製剤であるリュープロレリンなど、幅広く医薬品に利用されてきた。最近では、バイエッタに代表される GLP-1 アゴニスト製剤などの成功に加えて、薬物送達システム (DDS) 技術の進展も相まって、ペプチド創薬が再びブームを

迎えつつある。

本書は、「ペプチド合成の基本と新技術」「ペプチドリガンドの合成と創薬研究」などをはじめとする全8章から構成されており、ペプチド合成の最近の進歩からその創薬応用への取り組みについて、国内外の第一線の研究者が紹介するという形式をとっている。

本書の特徴は、上述したペプチド利用のゴールドスタンダードともいえる生理活性ペプチドの創薬についてはもちろん、更にその周辺領域にも切り込んだ幅広い研究が紹介されている点である。例えば、金属薬のキレーター、細胞内輸送の DDS 基材と

して働くペプチド、更には抗体類似作用を持つペプチドなど、興味深い研究が多数紹介されている。ペプチド創薬、と言われれば、生理活性ペプチドアナログを思い浮かべてしまった私の考え方を良い意味で裏切る、ペプチドの利用用途の幅広さとポテンシャルの高さを感じさせてくれる内容であった。

ペプチド研究を専門とする研究者はもちろん、ペプチド研究の最前線のエッセンスを手軽に楽しみたい方にも、是非お勧めしたい1冊である。

奥住竜哉 Tatsuya OKUZUMI